

別紙 1 - 1

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 ADHIKARI ARYAL Madhu Maya

論 文 題 目

カースト・ジェンダー意識が女子教育に与える影響  
—ネパール山間部の低カースト「ダリット」のエスノグラフィー—

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 服部 美奈

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 西野 節男

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 阿曾沼明裕

## 別紙 1－2

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、カーストとジェンダーの観点からネパールの教育をとらえ、低カースト層であるダリットの女子教育参加のメカニズムにこれらの要因がどう関わっているのかを明らかにするものである。

ネパールでは、カースト制度（差別的な身分制度）や家父長制度（男性優位社会）の慣行が未だに根強く残っている。ダリットの女子は、カーストとジェンダーという二重のヒエラルキーから社会・家庭の中で不当な立場に置かれ、学校教育参加も困難な状況にある。ネパール政府や国際協力機関の取り組みによって、ダリット女子教育の問題は次第に改善しつつあるように見えるが、実際には、統計などに表れない問題が依然として残されている。特に教育現場では表面的には気づかれない差別へと変化してきている。本論文の目的は、社会・家庭と学校教育のプロセスの中で生み出される差別に注目し、ダリット女子の教育参加をめぐる問題を明らかにすることである。本論文では、対象地域をネパールの西部地域ゴルカ郡 X 地区とし、所在する A 小・中・高一貫学校とダリットコミュニティについて、数次にわたるフィールドワークを行うことにより、実際に起きている新たな問題点を明らかにした。以下、各章の概要を示す。

第 1 章と第 2 章では、ネパールの女子教育参加における問題点を、先行研究や資料から明らかにした。そこで明らかになった問題点を詳細に考察するために、第 3 章では、現地調査の対象地を選定し、その背景・現状を概観した。第 4 章から第 6 章では、ダリット女子の教育参加を困難にしている要因を、①女子奨学金制度の機能不全、②学校の中の見えない差別、③女性に対する社会・家庭の意識という 3 つの側面から明らかにした。

第 1 章では、カースト意識の観点からダリット集団の位置づけを歴史的に概観し、カースト意識が教育に与える影響を検討した。ネパールにおけるカースト意識は歴史的、文化的、宗教的に形成されたものであると同時に、支配層が意図的に制度として取り込んだものでもある。それは人々の内的な意識と外的な行動の両面に強く影響を与えるものとなっており、人々の学校教育過程に対しても影響を与えている。ダリットへの教育の普及は遅れたが、近年量的な拡大が達成されつつある。一方、教育における質的な格差は現在も是正されていないことが明らかになった。

第 2 章では、ネパール社会における女子教育の捉え方とダリット女子の位置づけを検討し、女子教育参加の阻害要因を特定した。女子の就学率は向上しているが、中途退学者が多く留年率が高い。「女子だから」という理由で学校や家庭で不利な状況がもたらされることも少なくない。女子の教育参加を阻害する要因を三つの視

## 別紙 1 - 2

## 論文審査の結果の要旨

点から検討した。①経済的要因：家事労働者である女子は費用のかかる教育を受けさせても見返りがないため、男子の教育が優先されるという実態がある。②社会文化的要因：教育を受けることのなかった女性が娘に対して教育の重要性を伝えることができず、結果的に娘も教育の重要性を認識しない。③学校環境的要因：ジェンダーバイアスのあるカリキュラムや教育施設の不備、女子に対する否定的な意識や行動、さらに女子教育普及に効果があるとされる女性教員が不足している現状が挙げられる。

第3章では、調査対象地域における人々の生活の困難さや、カーストとジェンダー意識の現状をエスノグラフィックな手法によって記述した。調査対象地域として選定したX地区は全体的に、険しい地形や日常生活に必要なインフラの未整備といった環境や、伝統的農業に依存する経済的脆弱性などから、人々の生活は極めて厳しい状況にある。また、教育の普及が遅れ、カーストとジェンダーについても旧来の価値観・慣行が根強く残っている土地である。

第4章では、ネパールの女子教育問題を改善するための取り組みについて、現地の調査対象者の語りから考察する。特に、女子教育普及を目指した奨学金支給プロセスに着目し、その公平性や成果についての問題点を明らかにした。奨学金は成績優秀な生徒を優先して支給されるが、家庭での労働過多などによって成績が伸び悩んでいるダリット女子はこれらの奨学金の対象者に選ばれない。奨学金支給の可否の決定には貧困や人間開発指標に基づく基準が明確でないため、学校によっては奨学金支給の可否は校長や教師の判断で決められる。生徒の親の社会的・政治的地位が受給者選定に影響を与えていると考えられる。こうした恣意的な支給基準では、実際に奨学金を必要とするダリット女子まで行き届かない場合が多い。

第5章では、授業観察や座席調査、教師の意識調査の結果を分析し、ダリット女子生徒に対する目に見えない差別や偏見を検討した。学校教育では、カースト・ジェンダー差別意識を取り除いていくことが求められ、明示的な差別はほとんどなくなったが、実際には、カリキュラムや校則などには表れない、教師や生徒の態度に表れる目に見えない差別が未だに根強く残っている。日常的に繰り返されるダリット女子に対する否定的なラベリングの表明もダリット女子の学習達成度に否定的な影響を与えている。ダリット女子に対して教師が差別的な言動を取ることは、学習意欲向上の土台となる教師・生徒間の良好な人間関係の構築を妨げるものである。教員自身は差別的態度を意識しておらず、ダリット女子に与えている負の影響を認識できていないという点でより一層深刻な問題である。

## 別紙 1－2

## 論文審査の結果の要旨

学校内での差別に着目した第 5 章に対し、第 6 章ではより広く、社会や家庭における女性という属性に対する偏見や差別に注目した。社会や家庭に内在するカーストとジェンダーをめぐる固定観念や規範に基づく差別意識の存在を明らかにした。家庭の経済力と娘の教育は相関があることは否めないが、社会や家庭に根強く残る差別意識こそが、ダリット女子教育を困難なものとし、学習達成度向上を阻害する要因となっている。女性の家事労働は当然女性がこなすべき仕事、役割と見なされ、社会的に価値が認められることはない。幼少時から家事の担い手になる女性は自分自身の価値を実際より低く見がちであり、自信や自尊心を持つことができない。そして彼らが親となることで、ダリット女子に対する否定的な価値観や態度が再生産される。ダリット女子は、「女子」や「ダリット」という低位の属性に対して与えられている差別的な規範や認識ゆえに、教育参加が一層困難な状況に置かれている。

終章では、以上のことを次のようにまとめた。(1) カーストとジェンダー意識を生み出した宗教的社会文化規範は、社会・家庭内に不当な役割意識を根付かせ、学校内にも見えない形で差別行為をもたらした。(2) それが学習プロセスに格差を生じさせることとなり、結果的にジェンダーとカーストの二重のヒエラルキーにおいて低位に置かれたダリット女子の教育参加を極めて困難なものとしている。

以上の研究内容にみられる本論文の独自性と学問的貢献として特質すべきは次の 2 点である。

第一に、カースト意識とジェンダー意識の複雑な関係がダリット女子の学校教育参加にいかに関与しているかについて、丹念なフィールドワークによって明らかにした点である。本調査を行った時期のネパールには 10 年間にわたるマオイスト紛争の影響が根強く残っており、フィールドではときに危険な状況に直面したり、調査が困難な状況に陥ることもあった。そのような状況のなかでも細心の注意を払いつつ、調査を継続し、学校だけでなくダリットコミュニティに深く入り込むことにより、問題の構造を明確に示したことは高く評価される。

第二に、学校の中に存在する見えない差別こそがダリット女子の教育参加を妨げる最も根本的な問題であることを明らかにした点である。ネパールの法律では差別的行為が禁止され、ダリット解放運動の成果もあって、目に見える差別行為は減少してきた。しかし実際には差別は無くなっておらず、特に教育現場では表面的には見えない差別へと変化してきている。それはダリット女子に対して否定的な意識を持つ高カースト層の教師や生徒の学校生活の中に観察された。特に深刻な問題として、教師の差別的態度がダリット生徒の学習意欲向上を妨げ、学校に参加する意欲を削ぐ結果をもたらしていたことを明らかにしたことは高く評価される。

別紙 1－2

## 論文審査の結果の要旨

一方、本論文に対して審査委員からは以下の疑問点が示された。

- (1) ネパール全体のなかの対象地域の位置づけをどのように考えるか。
- (2) 論文では伝統社会の動態性よりも静態性が強調されているが、ダリット社会を变化の視点から捉える必要がなかったか。
- (3) 対象とした3つの低カーストごとに異なる側面はなかったか。
- (4) 論文で考察されたジェンダー規範は、もともと低カーストのものというよりも高カーストのジェンダー規範が学校教育を通して入ってきたと解釈することも可能ではないか。
- (5) 生徒と保護者に対するインタビュー結果を別々に考察しているが、カースト別に分けて考察するとまた異なる知見が得られたのではないか。
- (6) 対象地域は中間カーストの割合も高いため、高カーストと低カーストだけでなく、中間カーストも考察すべきでなかったか。

これらの指摘に対して、博士学位請求者はよく認識しており、質疑に対する応答も具体的かつ適切なものであった。以上を総合して、本論文はネパールの女子教育問題に新たな視点と知見を提供するものと認められた。

よって、審査委員は全員一致して、本論文を博士（教育）の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。